

NPO パートナーシップ協力プログラム 事業終了報告書

団体名 地球のステージ

代表者名 武田 絵莉香

1. 事業名

閑上の記憶「3月11日追悼の集い」の継続開催支援事業

2. 事業カテゴリー

③震災の経験を後世に伝える活動

3. 事業期間

2020年3月1日 ～ 2020年4月31日 (61日間)

4. 契約金額

500,000円

5. 担当者名

武田 絵莉香

6. 事業目的

毎年3月11日に開催している「3月11日追悼の集い」を今後も継続的に実施していけるようロジブックの整備や備品の整備を行い、継続的な開催が可能な体制作りをする

7. 事業の成果

毎年3月11日のこの日、この時間に想いを乗せることを第一としているので、開催、準備、運営は適切だった。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、学校の休校、企業の休業要請が重なり3月1日に中止のお知らせを出さざるを得なかった。スタッフ内で話し合いを重ね、当日は人を集めることをせずに閑上中学校遺族会のみを参列「閑上の記憶」は通常開館。事前に連絡をいただいていた「当日は行くことができないけれど風船を天に飛ばしたい」という方からお預かりした分も当日一緒に飛ばす予定で話を進めた。

当日は「やっぱり今日は閑上で過ごしたい」と気持ちがある方達が130名ほど集まり鳩風船にメッセージを記入した。中には8.12連絡会(日航ジャンボ機墜落事故遺族の会)美谷島邦子さん、ノンフィクション作家 柳田邦男先生、名取市長の山田司郎氏なども来館した。また、3月12日の新聞には地元の一番大きな新聞社「河北新報」、読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、共同通信発信の各紙面、NHK、TBC東北放送、ミヤギテレビ、東日本放送、ラジオ日本、で取り上げられた。「追悼に集い」は中止と広報をしたが、報道関係者からは問い合わせを絶えずいただいていたので関心の高さが伺えた。

8. 事業種別(コンポーネント)ごとの成果

(1) コンポーネント①

「3月11日追悼の集い」の開催、運営については、新型コロナウイルスの感染が拡大する中、遺族など多くの人の思いを大切にしたい気持ちと、「命の尊さ、大切さ」を伝える立場である自分たちが感染のリスクをおかしてまで開催してもいいのかという葛藤があった。

そして学校の休校、企業の休業要請が重なり3月1日に中止のお知らせを出さざるを得なかった。しかし、毎年3月11日のこの日、この時に想いを乗せることも団体としてのミッションであるため、スタッフ内で話し合いを重ね、当日は人を集めることをせずに閑上中学校遺族会のみを参列「閑上の記憶」は通常開館とした。事前から「当日は行くことができないけれど風船を天に飛ばしたい」という方からお預かりした分を飛ばす予定で話を進めた。

当日は130名ほど集まり鳩風船にメッセージを記入した。

3月12日の新聞には地元が一番大きな新聞社「河北新報」、読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、共同通信発信の各紙面、NHK、TBC東北放送、ミヤギテレビ、東日本放送、ラジオ日本、で取り上げられた。また、当日は午前中にFMヨコハマで生放送にて閑上中学校遺族会代表 丹野祐子さんが追悼の集いについて、閑上の記憶の活動について広報をした。「追悼に集い」は中止と広報をしたが、報道関係者からは問い合わせを絶えずいただいていた。関心の高さが伺えた。

「閑上の記憶」のスタッフはほとんどが地元で生活している方々で、自治会役員にも関わっている。閑上地区のコミュニティ連携はもちろんのこと、閑上小中学校との協力体制も整っている。基本的には事前の準備と当日の対応にて終了、その後の調整なども含めてスムーズに進めることができた。

コンポーネント②

今年新型コロナウイルスの感染予防という新たな課題もあったため、例年通りのログブックでは対応しきれないことから、新たにログブックを作成し、当日に臨んだ。

スタッフ間で何度も話し合いを重ね、それぞれの動きをしっかりと把握することで当日も大きな混乱をきたすことなく運営することができた。

また、これまでレンタルしていたテントや横幕などを、必要物品を買い揃えることができたので、次年度以降の継続開催に役立てたい。

9. 事業全体を通じて得た教訓や課題等

2020年3月11日の14:46、黙祷の時には突然雨が降り始めた。黙祷の後にメッセージ風船を配り、全員に渡し終わった頃に雨は上がったが、大きな虹が二重にかかり風も虹の方向に吹き始め、虹に吸い込まれるように鳩風船は飛んで行った。一般の参加者がその様子をSNSに投稿したところ、全国のユーザーが関心を持ち「いいね」の数が2万2千を超えた。東日本大震災の被災地や、関わりの少なかった人にとっては普通の日常だった3月11日だったが、SNSという媒体を通じて「東日本大震災が起こった日」という「気づき」を発信できたことはとても大きなことだった。

「追悼式」というとどこか暗いイメージで行われることが多いが、「閑上の記憶」の追悼式はあえて式とせずに「追悼のつどい」と題し、“生き残った人やこれから生きていく小さい子ども集まれる時間”という面も持っている。

亡くなった方達への追悼が第一義の目的だが哀しいだけの時間ではなく、風船を飛ばす瞬間は少し笑顔になれる追悼の集い。加えて、亡くなった大切な人たちへ向けてメッセージを書くことが、心の整理の時間にもなり、被災された方々にとって前へ進むための一歩にもなればという想いも込めているところが本事業の独自性のひとつ。

一年に一度の一過性のイベントには終わらせない工夫として大きな備品の購入という課題が解決できた。しかし遺族本人らが事前準備から広報、関係各所との連絡など全てをまかなうことはできないことから事務局が入り必要最低限の調整をする必要がある。

今年の3月11日も平日だったが、閑上中学校で亡くなった子どもたちの同級生の姿も見られ、本人たちも「一年ぶりだし久しぶり（に友達と会った）」と言っていて、このような時間と場所を提供できている「閑上の記憶」の存在意義は大きいものだと感じる。

10. 協力体制の構築

今回は表向きには「中止」としたため、行政などとの協力体制というよりはスタッフ間での連絡調整が重要となった。しかし、中には8.12連絡会（日航ジャンボ機墜落事故遺族の会）美谷島邦子さん、ノンフィクション作家 柳田邦男先生、名取市長の山田司郎氏なども来館され、また各地で起こっている災害の遺族、事故遺族、自死遺族などどのつながりも広がり、これからの活動継続の一助となると思う。

11. Civic Force との協働について

3月11日の追悼式典は、遺族の心に寄り添い続けるため10年の節目を過ぎた後も毎年継続して行うつもりです。今回のパートナー事業で備品を揃えることができたので、継続開催への大きな力となりました。ありがとうございました。